

氏名 楊琴

論文題目 日中同形二字漢語「人間」の意味変化について
要旨(和文)

「日中同形語」にかかわる従来の研究は、同形語の意味分類や意味の相違などに重点が置かれてきた。しかしながら、日中両言語にある同形語が、両言語においてその意味にずれが生じた具体的な要因、プロセス、ある人物の表現意図による意味変化の可能性、両言語においてどのように定着し、いかに大衆化され広がりをもたらしたのかといった考察は、現在も詳細に行われていない状況にある。それゆえに、本研究は、「日中同形語」の「同形類義語」と定義される二字漢語のうち、「人間」を典型例としてとりあげ、語学・文学・文献学・語誌などの多方面から、歴史的、個人的、通時的かつ共時的、微視的かつ巨視的にその意味の変化にアプローチしてみたものである。

古代中国の漢籍における「人間」は、「人々が生活する空間」の意に始まり、「人の住む空間・世俗・民間」の意味で、限られた散文にしか使われなかった。仏教が中国に伝来してから漢訳仏典では、その意味だけでなく、「天上・地獄」と対置される「人間界・六道の一つ・世の中・この世」などの意味でも、幅広く大量に使われている。即ち、「人間」の「この世・世の中・民間・俗世」といった「空間」概念の意味に、中国の仏教受容によって、仏教の典籍でよく用いられる「六道の一つ(人間界)」といった「空間」概念の意味が付加されたのである。稀に唐代の不空が訳した経文に「人間之骸」という表現が見られる。この経文では、「人間」が「骸」という身体語彙と組み合わせられることで、その内包する「ヒト」の意味が浮き彫りにされた。しかしながら他の宋代までの文献では、「人間」が「ヒト」そのものを意味する例を見出すことができない。中国における「人間」という語は、漢籍での使われ方が漢訳仏典に先立って定着していたことにより、「空間」概念の意味で用いられるのが一般的であった。このような漢語「人間」が漢籍や仏典などを通じて日本にもたらされ後、「空間」概念の意味から分離して、日本語史上にみられる独自の意味「人界に住むもの。ひと。人類」へと変化し、徐々に「ひと・人類」そのものの意味で、日本での定着を遂げていくのである。

第一章では、主に空海の『性霊集』や『本朝法華驗記』で使用されている「人間」を、使用された思想的文脈に即して解釈した。空海が、漢文の修辭法(文のリズム感・上下語句の構成・対比修辭・文字数配置など)に因んで、不空に倣って、「絶人間之腸」のような文章を記している。ここでの「人間」は、「骸」「腸」という身体語彙と組み合わせられることで、その内包する「ヒト」の意味が浮き彫りになった。「人間之…」を身体語彙「腸」と共に使い、「人間」の内包する「ヒト」の意味を引き出した可能性が極めて高いと考えられる。則ち、『性霊集』における「絶人間之腸」は、空海が新たに表現したものである。それは空海の表現意図にもとづく意味の拡張ではあるものの、条件が揃えば他の文献でも同じ意味で使用されることがある。そして、平安時代の資料にはほとんど見られないが、『大日本国法華驗記』『非人間 亦非鬼神』『今昔物語集』『天人八目瞬カズ 人間八目瞬ク』では、それぞれの表現条件によって、「ヒト」という意味が確定されていると論じた。

第二章について、「日記・紀行」では、「人間」という語自体が認められなかった。『発心集』は前代の文献から引用したそのままの形で、存在している。『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』にみえる「人間」の意味は、明白に「空間」に存在する「ヒト」そのものに解釈することができなかったが、「心」「形」などの身体を表す語が混濁しわかりにくくなり、「世の中」の意味より、「世の中に住むヒト」の意味へと移り変わっていく傾向が見られる。そして『鴉鷺物語』『伊吹童子』『俵藤太物語』に「ヒト」を表す「人間」の用例がみられることは、室町時代にすでに「人間」が「ヒト」の意味で一般的使われている可能性を示した。

第三章では、僧侶や学識者だけに独占されていた思想をそうでない人々にもわかりやすい言葉で難

解な仏教真義を説く必要性が求められる時代における唱導資料について考察した。ここでは口語的なものから文語的なもので、伝達目的に応じて、多様なスタイルが見られる。そのうち、「ヒト」と「空間」の使い分け（「ヒト」の意味の明示）が思想的文脈よりも、語法の上ではつきりとしているのは、口語的スタイルの唱導である。口語的スタイルで明示されているのは、何度も本文を読んで理解するのではなく、聞き手が聞いてすぐに理解できるようにするためである。口語的資料にこのような特徴が見られることから、「人間」の意味変化とその広がりについて二つの可能性を提示できる。唱導に限らず、口語ではこのような明示化によって、「ヒト」の意味だけで使われるようになった可能性及び唱導そのものが、新しい「人間」の意味（ヒト）の広がりになった可能性を提示していると論じた。

第四章では、道元が『正法眼蔵』において、独自の表現手法によって「人間」という語の「この世・世の中」という意味と、それに内包される「この世に住む（ヒト）」という意味とに分離したことについて論じた。そして、この著作における「人間」の使用法が、道元の明晰且つ平易な表現を言語形式の上に実現する、という彼の言語思想を端的に表す事例であることを指摘した。この明晰で平易な言語形式の実現は、「人間」が「ヒト」を表すようになるための要因のひとつであることを示した。

第五章では、「人間」を使用する表現および「ヒト」を意味するかどうかが、文献の成立年代を推定するための指標になり得ることを、『宝物集』によって示した。『宝物集』『三巻本』だけに見える「人間ノ習」の表現は、覚一本『平家物語』『とはずがたり』と類似することから、「三巻本」は、平康頼が生存していた当時のものでなく、覚一本『平家物語』『とはずがたり』と近い時代のものであることを推測した。

第六章について、「弁曉草」で良く用いられた「人間」+「界」という複合語は、覚一本での使用が見られなかったものの、延慶本にはみられる。よって、語りの現場では、「人間界」と「人間」とが使い分けられていることが想定できることと、連用格を示す「に」と併用することで、「生人間」「帰人間」「返人間」といった文言は、「人間へ」・「人間で」だけでなく、「人間に生まれる」「人間に帰る」「人間に返る」というように理解されることは、「人間」が「ヒト」を表すようになるもう一つの要因であることを示した。『保元物語』『平治物語』『平家物語』『太平記』ともに「ヒト」を表す「人間」がみられたことは、「ヒト」を表す「人間」の使用が、鎌倉後期〜室町時代のある段階に、一般的に広がっているという可能性を示した。

各章の考察から、日中両言語における「同形異義語」と定義される「人間」の意味にずれが生じた要因として、結論として次の四点を指摘した。

(一) 「個人の表現意図に帰する要因」——使用者が既成の概念を拡張して表現しようとすることによる。

(二) 「思想的背景の違いにもとづく要因」——中国での仏教受容と、日本での漢籍と仏典受容の違いによる。

(三) 「社会的コミュニケーションの要請にもとづく要因」——僧侶や学識者だけに独占されていた思

想をそうでない人々にもわかりやすい言葉で難解な仏教真義を説く必要性が求められる。

(四) 「日本語の言語運用に帰せられる要因」——語構成や語法によって、内包する意味が引き出され

確定される。